

## キャリアオーバーした慢性疾患患者の青年期における喫煙状況～川崎病の例～

久留米大学小児科 牟田 広実

【背景】青年期の喫煙率上昇が社会的な問題となっているが、小児科からキャリアオーバーした青年期の慢性疾患患者の喫煙状況について調査した報告はみられない。

【目的】本研究では、慢性疾患として川崎病をとりあげた。川崎病は重篤な冠動脈障害を残すことがあり、種々の危険因子が加わることにより動脈硬化が促進する可能性が示唆されており、特に喫煙開始を防止する必要性が考えられるためである。

【方法】初回調査は2003年に実施し、当院に受診歴がある満16歳以上の患者432人に質問紙を郵送し、喫煙状況を調査した。その後、初回調査で現在喫煙している/過去に喫煙していたと回答した患者については、3年後の2006年にその時点での喫煙状況について追跡調査した。解析に際し、1)正常群:経過中1度も心血管障害を指摘されていない患者、2)心血管障害群:心血管障害を指摘された患者に分類し、解析した。

【結果】1)初回調査  
質問紙を郵送した432人のうち、転居などで郵送不能であった162人、および返信のなかった85人を除いた計185人を解析対象とした。回答者の内訳は、正常群148例(80%)、心血管障害群37例(20%)で、回答率に有意差はみられなかった。男女比は1.5(男:111人,女74人)、年齢の中央値は22歳(16-31歳)で、罹患後年数の中央値は18年(7-26年)であった。  
現在喫煙している患者が53人(29%)、過去に喫煙していたが現在は喫煙していない患者が12人

(6%)、今まで喫煙したことがない患者が120人(65%)であった。現在喫煙している患者の割合は、男性に多く(41% vs 9%,  $p < 0.001$ )、正常群と比較し心血管障害群で有意に少なかった(16% vs 32%,  $p = 0.001$ )。現在喫煙している患者の1日あたりの喫煙本数の中央値は15本(2-40本)であり、正常群と心血管障害群で有意差はみられなかった( $p = 0.14$ )。喫煙開始年齢の中央値は18歳(14-23歳)であった。ほとんどの患者が、「何となく」や「興味本位で」喫煙を開始していた。

129人(70%)の患者が、喫煙と動脈硬化の関係について知っているとは回答したが、そのうち36人(28%)の患者は喫煙していた。

### 2)追跡調査

初回調査で現在喫煙している/過去に喫煙していたと回答した患者85人に郵送し、転居などで郵送不能であった2人、および返信のなかった16人を除いた計47人を解析対象とした。

初回調査時点で現在喫煙していると回答していた35人中8人が禁煙、過去に喫煙していたと回答していた12人中8人が禁煙を継続していた。

【結語】重篤な冠動脈障害を残すことがある川崎病の既往者であっても、喫煙率は低くなかった。今後、慢性疾患患者のフォローアップの際には、小児科受診中の時期から患者を含めた家族全体に対する防煙教育が必要であると考えられた。また喫煙を開始した患者に対してこのようなアンケートを行うことだけでも、禁煙に対する意識を高め、一定の効果があると考えられた。